

小町風伝

太田省吾

登場人物

老婆

少尉

隣家の父

隣家の娘

隣家の息子

村上さん

その妻

サチコ

医者

看護婦

アンパンを食う男

襖を担う男

タンスを担う男

携帯ラジオの男

洗濯物の女

ランニングシャツの男

ブルマの女

子供たち

はじめに

この台本において、老婆、少尉、男、子供たち印の科白（及び■印のある科白体のト書き）はすべて沈黙のうちにあつて、へ科白として外化されることがない。たとえば、この劇の主人公である老婆の科白にはすべて老婆印が附されてあるわけであるから、終始、舞台の上でありながら、彼女は一言もことばを発することなく、沈黙のうちにあることとなる。

沈黙のための科白というのは、おかしなことのようと思われるかもしれない。しかし、考えてみると、わたしたちは応々にして、直接ことばにしていることを、内的にもそのまま語っているわけではないし、また、沈黙のうちにあつたとしても、それは内的にも無言であることをかならずしも意味してはいない。

つまり、現実においては、われわれはむしろこういった矛盾する言語的事態を常態として生きているのであるといつてよいように思われるのである。

1
襪の十二単衣に身をつつんだ老婆が、ひとり風のありかを訪ねるように、あるいはゆるい風に身をまかせるようにしてあらわれる。

立ちどまった老婆は、軀をなでる風を衣にふくんでゆれている。

衣は、時の漂白を受けて白い。

老婆　…夜が、あたしの鎧が脱げていく時なんだもの、夜明けがいちばん冷えるのさ。闇が、あたしの楯がとけていくんだもの。夢が、あたしの槍が…。

あれは…星…よね。消えていないんだねえ、まだひとつ。あたしったら、遠くの星はよく見える、身のまわりには盲のくせに。…おしまいからかぞえていちばん星。残っちゃった星ひとつ、朝の中に。…未練だよ、消えな、さよなら。…ふっ。

吹いたって、消えやしない…。

■わたしにはわかっているわ。わたしは半眠半醒ゆめうつつのあいだにいる、そうなの。わたしはこんな時が好き、こんなあいまいなところに身を浮かせていることが。そうね、もう少し、このままこうして…。

老婆 ……なんて夢だったんだろう。 ……夢の中でこんなことってたわへ目が覚めたなら、それは夢なんだろうけど、いつまでも覚めなけりゃ、それは夢じゃないよ ……夢の中に、あたしが二人いたわ。一人のあたしは、眠って夢にうなされていたわ、そしてそのあたしをもう一人のあたしが一生懸命揺り起しているのよ。 ……そんな夢だったわ。

揺り起こされた方のあたしは、起きあがると、揺り起したあたしの顔をしげしげと見ていた。へねえ、あんた、なにをあんなにうなされていたのさへうん、ちよつとねへねえ、ちよつと、これちよつとおかしいと思わない？ あたしとあたしが顔を見合っているなんて。これは夢にちがいないわ。そうよ、ね、ということは、あたしたちを夢に見ている人がいるにちがいないわへじゃ、あたしたち、だれかさんの夢の中でこうしているのねへそうなのよ

あたしとあたしは、くすぐられているみたいに、ククククって笑い合っていた。まるで、娘みたいだったわ。

へいつまでも目が覚めなければ、それは夢じゃないっていうけれど、あたしはこうして目を覚ましたのに、ここは夢の中だったわへ揺り起された方のあたしは、そういうと笑い顔をだんだん歪めて、きよろきよろしはじめた。自分を夢に見ている人を探していたのよ、きつと。そして、どうするのかと思っていたら、このあたしに向って懺悔しはじめたわ、まるで神様を見上げるような目をして。

へそれは本当のこととでございませうか、わたくしが老婆であることが、百歳を越えた人間であるということがでございませう。……思いますが、わたくしは娘の頃からそうでした。そういったことが不可思議でなりません。あの頃は、十六という歳が女にとって、ひとつの大切な区切り、娘から女への区切りでございました。わたくしは、十六になり嫁いで行く年上の女を身近に見て知っておりましたが、その女たちは、十六になると十六に、誠の女になっておりました。どこか、わたくしの知らぬところで、蟬や蛇のように脱皮でもしてくるのだとか思われぬように、十六になると、十五の時とははつきり相違しておりました。どこがどのようには言いにくうございませうが、物腰が確りと、坐ったようになりました。わたくしは、十七になっても十八になってもそうはならず、それがいまだつづているように思われるのでございます。風呂で見る母や姉たちの乳も、わたくしのものとはちがって見えまして、実際、相違していたように思われます。どことなくたよりのない、そのわたくしの乳の顔つきを見られるのは恥かしいこととでございました。

ね、あんた……こっちのあたしちゃん、途中でわるいけど、ちょっと行ってくるわ。あたしオシッコなの。……聞こえたの。ね、そっちのあたしちゃん、ちょっとその人のややこしい話やめさせてよ。あたしの声が聞こえないらしいのよ。

へユキは慰めをするからだ。近所にいた、十になったばかりのくせに、乳をゆさゆささせているユキという娘は、そう陰口を言われておりました。わたくしは、慰めというのはどうい

ことを言っているのか知っておりました。しかし、それをどうして慰めというのかはよくわかりませんでした。慰めが足りないから乳がたよりないのだと、十六のわたくしはその陰口から思っておりました

ね、行くわ。ちよっといいわね、御不浄。あんたの話、ながそうだもの。

へねえ、またなにか言ってるわよ、あんたの神様へじゃましないで。……わたくしは、今でも日に幾度か乳に触れます。仰向けに寝ると、もう乳らしい肉をさぐることはできません。しかし、横向きになったり、俯せになってさぐりますと、いろいろのことごとを考えることのできる肉の種に触れることができるのでございます。それはありがたいことでございます

ね、やめさせてよ。あたし我慢できないわ。行くわ。

へ神様、待って下さいませ。わたくしを十六にして下さいませ。確りと坐ったようにふるまえる女にして下さいませ。いつまでも脱皮できない蟬は悲しうございます。……待って下さい。ああ、あたしの神様がいつてしまふ……

……いいのね、おわたのね、あきらめたのね。ああ、下手な夢にひっかかって夢の裾が鉤ざきよ。……遠いなあ、御不浄への道。今度引越すことがあったら、その時は断然トイレ付きの部屋にするわ。

2 (注一)

■風かしら……だれ……なに……ガラス戸だわ、ガラス戸がすべってくる。卓袱台ちやぶが地を這って……行列だわ。いつも、いつも行列、夢のおわりには……世の中がね、こっちへ向ってくる。いろんな人たち。そうね、いろんな人たちがやってくるわ、そしていなくなるの。ダンスがゆれてる、宙に……いやだ、あれは小川さんじゃないの、三号室の。小川さんがダンスをかついで歩いてくる。……これは、なんて笛かしら、笛の音がする。……あれは大家さん夫婦だわ。おくさんが布団をひきずって……旦那は、あれはなんだろう、バットよあれ、野球の。どうしたのかしらあんなもの持って……女の夢のしるしってわけかしら……襖だわ。わたしの部屋の襖なんかかについて、あの人、だれだろう、どこかで見た人。……あんなに破れていたかしら、襖。ひどいわちよっと、こうして見ると。……張り替えようかしら……でも、まあいいわ、いいのよ、あの破れやシミが夢の入口をこさえてくれるんだもの。その方が大事よね、そうよ、あのままにしておこう。オヤ、医者だわ、ヤブまでやってくる。あんたのいうことなんてちっとも気にしてないわよ。……ひとの軀いじって、そのあげく、ひどいこというんだ、あのヤブ。でも、こんな夢に出てきてたすかったのよ、あんた。だって、今あたしとっても寛大なんだもの。

いろんな人たちが、静かだわ。……フフフフ、いろんなとって似てるよね、みんな。そうよ、年をとるほどいろんな人たちが似て見えてしかたない。それはそうよ、生れてき、まあ、なん

静かな行列が、老婆のまわりで交錯するうちに、建具や家具や細々こまごました道具が吹きだまるように置き去られていく。

老婆がその中に坐る。と、その吹きだまりは、老婆の部屋を構成している。音楽、一息ごとに消えて行く。

老婆 あたしの部屋……戻ってきたのね、またここに……朝ってわけ……だわ……ダンス……行
李……卓袱台……戸棚……ほら、さわれるわ……といっても、それがなにかの証明になるって
わけでもないけど……洗面器……洗面器、そうね、顔を洗おうかしら、やっぱり、朝なんですも
の……ね。

■朝よ、洗面器の中にあんた。

3

老婆 ひとりだわ。

……ばかね、あたりまえのことを、わざわざどうして毎朝考えるのかしら。

うーん、ああ、水はいいわ……いい気持。洗面器がもう少し大きかったら、この中で浮身をして、ぼんやり空を見られるのに……。

おや、それはなんだい。そんな軒下からのっそりと顔を出したのは。それでお天道さまかい、お日さまかい。軒下の取入れ忘れたパンツのかげから顔を出すなんて。志というものを忘れちゃだめよ。三十階建てのビルでも真二つにして登場したらどうなの。それがあんたの志というものよ。志をさびつかせた太陽なんて……。

温かいものでも食べようかしらね。夢から覚めるとおなかがすくわ。……おいしいものでも食べたいね。

4

■わたしが手にしているのは、お鍋……そうよ、別のこと考えていたって、わかってるわ、そのくらい。あたし考えている、別のこと……。

老婆　へ奥様、これが品書きでございますが、なにをお持ちいたしましょう〜

だれ、だれなの、あたしを奥様だなんて。……ああ、あたしよりも、思い出の方が早くしゃべ

り出してゐるんだわ。

へきみ、この方は奥様ではない。わたしたちは、まだ、夫婦ではないのだよ。これは少尉殿、お似合いの御夫婦とお見受けいたしましたので。気をきかしたつもりが……。で、お嬢さま、御注文の方は。へそう、なににいたしましたしょう。洋食の品書きはわたくしよくわかりませんわ。

■これは、電熱器。

老婆　へロシアン・スープというやつをやってみませんか。ロシア式の煮込みのようなものです。血の色がしてとって嫌う者もおりますが、どうして仲々いけるのです。それにわれらが敵、露国を食い、飲み下し、我が国の戦勝を祈り、あわせて小生の出征祝いとするという趣向はどうです。へ少尉殿、ご出征を。御苦労さまでございます。へうん、いや、ありがとう。へそれにいたしますわ、わたくしも。へでは、ロシアン・スープをお二つお持ちいたします。

■水が要るわ、ヤカンどこに置いたかしら。

老婆　へああ、ああ、きみ、その前にブドー酒を。ああ、ああ、それに、蓄音機をかけてもらおうか。へかしこまりました。で、音楽はなにを。へなにがいいかな、ね、小町さん。へわたくし小町

ではありません、コマですわ、駒子です。へそうでした、失礼。へわたくしは「バラ色の人生」が。へ「バラ色の人生」だそうだ。なんだい、その顔は。へお嬢さま、それはずっと後の世に流行ることになる歌でして。：：：へ固いこといわずともいいじゃないか、きみ。わたしは明日出征という身だ。われらが前途をバラ色に彩ってくれたまえよ、ハハハハ。

■これは、戸棚の引き戸。：：：。「ハウスシャンメン」か。：：：お鍋の水に、なに。：：：。それは、あたしよね。

老婆　：：：なにを薄笑いしてるのさ。：：：うん、いろいろやってみてわかったんだけどね、この貌かおがいちばん楽なんだよ。：：：スイッチどこいったかねえ。：：：貌をひとつひとつの気持にあわせると力が要るよ、めんどうなんだよ。

■あつたわ、スイッチ。

老婆　：：：いやな音。電熱器って、なぜこんな声で身ぶるいするのかしら。
おそいわね、「バラ色の人生」。

■だれも、蓄音機をかけてくれる人がいないので、わたしがハンドルをまわさなければならぬ、です。

……それでも、聞こえてくるわ、耳をすますと。ほら風の音が……。こうしていると……。ほら、風の奥から、エディット・ピアフの「バラ色の人生」が……。はじめて聞いた時から懐しかったわ、この歌。そんな歌ってあるものなのね。

だれ……。ひとの匂い。あの人だわ……。今日はどこから出てくるのかしら……。襖のシミかしら……。ちがったわ……。行李の底から……。

恥かしかることもないだろうに、あたしったら、おかしいわ、どきどきしてるじゃないの。

あのひとつたら、あたしを追いかけまわしていた時の目をして……。

老婆 どこを見てるの、ここよ、あたし。どこへ行こうっていうの。

少尉 小生は軍人です。帰ることは考えずに征きます。……つまりあなたの家の門柱の傷は九十九のしるしでおわることになりました。……愛の行軍……。毎夜毎夜……。小生の薄い血は、一夜ごとに濃く重装備されていきました。そして小生はあなたへの行軍によって救われていった。

…あの行軍は、単なる距離ではなくなっていた。…暗い森、ざわめく竹藪、小さな起伏…
…小生は闇の中を進む方法を手に入れていきました…。へ少尉殿、乗船の時刻です、お急ぎを
おお、そうか。…嘘言ではありません、断じて。小生は今では、状況が許されるなら爬虫類の
ようにふるまえるはずです。ね、小町さん。

老婆 何度言ったらわかるんだろうね、この人。わたくし、駒子ですの。いわせてもらえば、血の
気を隠した小町、コマチから血の気を隠してごらん、コマ子だろう。そして、ミチを、さすらう
道を捨てた小町よ。コマチからさすらう道を捨ててごらん、コマ子だろう。駒子は、だから、そ
のかわりこの四畳半を荒野としてさすらうことができるんだわ。

少尉 顔をあげて下さい。あなたのお顔がどんなだったのか…実は、この九十九日の間に、小
生の頭の中で、あなたは夜毎に脹らんで、考えてみると、元のあなたの顔を思い出せなくなっ
ている。ね、小町さん、あなたの目がどんなに輝いているのか、鼻はどんなふうのびていたの
か、口はどんなふうに開くのか。

老婆 だからですの。あなたの脳組織の中で、九十九日もしられたわたくしがどんな姿になっ
ているのかと思うと、とても顔などあげられません。あなたの妄想の中の姿にはたちうちでき
ませんもの。

少尉 今日の出征は、天の恵みなのかもしれない。小生は、実は百夜目が恐ろしかった。約束通
り、百夜目を迎えることとなっていたら、逃げ出していたかもしれない。

老婆 そうら、とうとう言ったね、あんたは恐ろしかった、こわかったのさ、出征だって、本当かどうか……口実だったのかもしれないわ。

少尉 へ少尉殿、隊は、整列を完了しております。どうぞ乗船をお急ぎ下さいわかっておる。……あるいは、あるいはです、小生の胸に脹らんだあなたは、その夜、コツパミジンに爆発していたかもしれない。

老婆 花火だなどおっしゃらないで。

少尉 武人の無骨な比喻を笑わないでいただきたい。文人ならば、ボタン、シャクヤクと喩えるところだろうが……。

老婆 わたくしを花と呼ばないで、散るもの名で呼ばないで。

■どこを見てるの、あたしはここにいるのよ。

少尉 へ少尉殿、お急ぎをへああ、わかっとなると言っておるではないか。……帰ることは考えずにまいります。それにしても、あなたをこんなに、手のとどくところにおきながら……ああ、もう一言、もう一言不足だ。勇氣と言葉は水と油なのか、一個の個性の中で決して混じり合わせものなのか。

老婆 そうよ、あなたとあたしの夫が同一人物になっちゃいけなかった、同じ人が演じるべきじ

やなかったのよ。遠き愛と近き愛は水と油なのよ。事実そうだったじゃない。あなたは戦地から帰っても、あたしから離れているべきだったの。

■なんて事。音楽までいじわるするの。これはあたしの注文した歌じゃないわ。ダミアよ、暗いわ。こっちを向いたと思ったら、なんて目。

少尉 これがお前の隠れ家か。おれの女房なら、もう少しましな家にしろ、たとえおれから逃れるための隠れ家にしろだ。今や、お前は大尉の妻なんだからな。

老婆 どなたです、ひとの家に上り込んできて。あたしの少尉は死んだんだよ。

少尉 バカ、子供はどこだ。なぜ家を出た。

老婆 あの、まちがえの戦死通知が、どんなまちがえを生んだかわかる？ 大まちがいだっつたのよ。あたしは、まさかと思ってたあなたの無事の姿に、前後の見境いをなくしたわ。見境いなくあなたのプロポーズに乗っちゃった。

少尉 昔のことをぐだぐだ言うな。お前、それは何だ。こんな時にお前、よくソバナぞ食う気になれるなあ。……手間をとらせるな、どうせ戻ってくるくせに。な、おれは忙しい身なのだ、ややこしいことするな。

老婆 あたし、戻らないわ。

少尉 そんな目でおれを見るな。……あいつは小鳥のようなものだ。海を愛し、小鳥を愛する。男には二つの女が必要なものなのだ。お前は海、小鳥ごときに波風立てずゆったりとしている。

■ なにかが、鍋に舞いおちてきたわ。

老婆 なにかと思つたら、花びら。どこから舞い込んだのかしら。こんな時でも散ることあるのね、花びらって。……だれも見るともいないだろうに。

少尉 聞いておるのか、海の話。

老婆 聞こえないよ。花びらを見てるんだからね。こうすればいい、花びらのことを考えれば、こんな人いなくなるわ。

少尉 さ、海を抱くぞ。駒子、おれをおぼれさせる。

老婆 聞こえないよ、あなたなんか相手にするもんか。小鳥におぼれちゃう男が相手にできるもんか、相手不足だよ。

少尉 よし、おれは、小鳥を抱きに行くぞ、いいな。

老婆 しらないよ、あたしは、花びらのことで頭がいっぱいなんだもの。……あなたにかおっしやってますの、まだ。

少尉 子供はどこだ。国夫はあいつが見るといっておるからな……。

はじめて人の声が、老婆の部屋に。

村上 小野さん。……生きてる。ね、今日もがんばってるね。わたしだよ、大家さんだ、村上さんだよ。

老婆 フッフ、人ちが良かったわ。

村上 元気だね。今日も元気でよかったね。朝の食欲元気のしるしって、ね、うん。……ン？ ねえ、困っちゃうよ、駒子さん。村上さんは困っちゃうよ。助けておくれ。もうたくさんだよ。オシッコの始末は。

老婆 この人ったら、変らないわ。もう、何年になるかしらね、忘れてしまったけどはじめて会った時からずっとこんなだわ。……休み時間だわ、この人がいる間は考え事はできやしないんですもの。休憩。

村上 いやだよ、ぼくは。予感が当たってしまった。朝起きただろう。すると、チーンとオシッコの予感があったんだよ。チーンとね。ね、こんな予感が鋭くなっても実はなんの役にも立たないんだよ。だめになるぞ、おれは。こんなことから脱出しないとだめな男になってしまふ。だって

そうだろう……うん。朝起きるとオシッコの始末のことを考えるんだよ、チーンとね……だめな男だ。ねえ、オシッコなんかしないようになっておくれ、死んでしまっておくれよ。困っちゃうんだよ、駒子さん、本当に……。聞いてるの？

あいかわらずなんだなあ。口をきいてくれないんだなあ。十八年でたった三言だよ……。ねえ、駒子さん、あの先生ヤブなんじゃないだろうか。へこまでくればもう三日〜って約束していったんだよ。それなのに、ね、そうだろう……うん、そうだ、三日目がすぎてゆく。ヤブなんだきつと。村上さんはそう思うよ、駒子さんもそう思うだろう。オシメはどうしたんだい、どれ、見せてごらん……。恥かしがっているのかい。困っちゃうなあ、こっちなんだよ、村上さんの方だよ恥かしいのは。

■あんまりしつこいことするので、あたし、やってやったわ。

村上 ツツツツ、わかったよ、駒子さん、わかったから噛み切らないでおくれ、村上さんはわかったんだよ。見ないから、ツツツツ……オシメなんかしなくてもいいから……オヤ！

■あら、どこかのラジオから、朝のラジオ体操の音楽が聞こえてきましたわ。

村上 ……今日がはじまったね、今日も。ほら、聞こえるでしょう、オイッチニ、オイッチニ…
■やっと帰っていったわ、村上さん。このラジオの音、きっとまたあの人のよ。おかしいの、携帯ラジオでラジオ体操聞きながら、顔を洗う人がいるのよ。あんなことしてなに考えてるのかしら、あの人。

こんな早くから、干し物してるわ、あの女。干し物している女に男って欲情を感じるって、聞いたことあるけど、あの女それを知ってるのかしら。

ああ、隣りの家、朝ごはんらしい、食器の音がする。わが家も…お湯が煮立っております。

7

父 朝から、なんだっていうのだ。……見てみる、この新聞。下らんこと書きやがって。

娘 父さん、どうぞ。

父 うん……。どういいうつもりなのだ、え、これは。……うん、じゃ、いただこうか。

娘 いただきます。

■ ラーメンが、ほぐれていくわ。

老婆　ほぐれてゆく、お墓の柳。あれは春の宵の風。風が吹いていたんだわ。風に吹かれて、長い髪の中の女のようにくねっていたわ。あの人が帰ってくることになるなんて、思いもしなかった。百夜通いも全うできない人だったけど、もうこの世にいないのかと思うと、ほだされたわ。戦勝祝賀の提燈行列の日だった。ああいう日はいや。ああいう健全優良日は、この世に日影月影もなくなつてのつぺらぼう。だからあたしはこの世にいらなくてしかたなかった。……夕暮れの墓地を探したわ。……あの人が入ることになる墓石の前で、あたしは裸になったのさ。わが裸身をね、霧にぬれた墓石にさらしたわ。霧にぬれた墓石は鏡だったよ。……あたしの裸身が墓石に写って、美しかった、すごかった、そうだった。……陳腐ないいまわししか受けつけないほどだったわ。

■ どうしたんでしよう、となり。

娘　父さん、おかわりは。

父　いらん。こんなに気持が乱れている時は少めにしておかんと、消化によくない。
娘　どう？

息子 ……。

父 口で答えられんのか。

息子 行ってまいります。

父 お前、なんだそれは。どこへ行くつもりなのだ。

娘 朝ですもの、役場……。

父 役場へ勤めに出かけるのに、へ行ってまいります〜こんな言い方か。

息子 ……行ってまいります。

父 もう一度。いつもの注意を思い出して。

息子 ……。

父 聞こえないのか、もう一度。

息子 行ってまいります。

父 まだ、行ってまいりますも言えないんだなあ。いいか、注意その一、お前の目標は自然の獲得

だ。目標は遠い遠い、遠いなあ。それじゃまるでよくない。さ、もう一度やってみるのだ。

息子 ……。

父 注意その二、考えすぎこそ落とし穴。自然であろうなどと考えちゃいけないのだぞ。世間のだ

れでもがやれていることだぞ。ただなに気なくへ行ってまいります〜、さ。

息子 ……。

父 わたしたちが見てるなんて考えないで。見ていないから、な、聞いていないぞ。お前いいか、見ちゃいけないのだぞ。

娘 ええ、お父さん。

父 さ、も一度やってごらん。

■隣の息子の息づかいが聞こえるようで、あの凍えた唇に、わたしの耳は釘づけ……。

老婆 そうよ、たとえ夢の中だからってどんな男でもいいってわけじゃないわ。あの子、いいわ。

あの子となら逢びきしてもいいわ。

父 どうだい、やったかい。

息子 えっ……ええ。

父 どうだった、巧くいえたかい。

息子 ええ、とても。

父 嘘だろう。何故できないのだろうなあ。たった、なに気なくだぞ、いいか、なに気なく。ということは、わかるかな、なに気なくという意識をなくすることだ。ということとはわかるかな、なに気なくという意識をなくするという意識をなくすることを要するのだ。つまりそれが、なに

気なくということだ。よく見ておくんだぞ……こう坐ってるなあ、朝ごはんもおわった。すつと立つ。すつとというのは言葉のあやだ、それに気をとられちゃいかん。そうだ、ここで鼻歌でもうたおうか。少々行儀が悪くないこともないが、この際だ。つまりなに気なくという意識をなくそうとする意識を、鼻歌の歌への意識へ移行させてだな、こう、その意識を鼻の穴から抜くのだ。フフフン、フン、フフン……で、まあ、ネクタイでも一寸気にするとか、な、フフフン、フン、フフン……な、こういうふうにしておいてだな、この状態をくずさずに……へじゃ、いつてまいります。できるじゃないか。

息子 ……。

父 　　いってまいりますを見くびっちゃいかん。世間へこの軀を乗り出す第一歩だ。ここでつまずいていたらどうする。だれだってそうしているんだ、だれにだってできているんだ。世間じゃだれだってみなできているんだぞ。父さんは無理をいつているわけではない。無理をいつているのだろうか。

娘 　　いいえ。

父 　　そうだ、お前を自由にしてやろうとしているのだ。姉さんも仲々うまくやっている。お前、やってみせてごらん。

娘 　　へいってまいります。

父 　　な、できてただろう。そうだ、あの呼吸だぞ。硬くも、やわらかすぎもしない。まあまあでき

てたじゃないか。あれだったら息をして生活できる。生活とはこういうものだ。お前は、母さんの血をひいてしまったのだなあ、悪い血だ。

娘 お弁当です。

息子 いらぬよ、今日は土曜日だよ。

父 ……お前、いいか、お前のいいたいことはへいらぬよ。これだけのことなのだぞ。たかがこれだけのことを、存在をおびやかされたように表現するな。生活には、こう、レベルというものがあつて……。

娘 でも、せっかくつくったんだから……持っていてちようだい。

父 ン、どうしたんだ……どうしたんだい、お前。いいかい、今へせっかくつくったんだから。と
いったな、な、そのあとに、こう、間ができていたぞ。えっ、弁当をつくった努力に必要以上に謙虚であろうとする、なんというか、そういう無駄な意識でこわばっていたぞ。

娘 へでもせっかくつくったんだから持っていてちようだい。

父 それで、まあまあだ。

息子 ありがとう。

娘 たまには公園にでもいって食べてくるといいわ。

息子 うん……。

父 大分いいぞ。

娘 おかずは、黄色いタマゴ焼きと黒いのり、それにミドリ色のオシンコだわ。

息子 おいしそうだなあ。

父 いいぞ、いいぞ……。

娘 なにをふるえているんです。朝です、元気を出すんです。

父 又か又か、又なのか。

息子 なんでもないよ、姉さん。

娘 深呼吸をしてごらん。

息子 ……。

娘 とにかくやってみるんです。

■平手打ちの音、あれ。今日もね……。

娘 ほら、息を深く吸って……。ゆっくり吐いて……。そうです。どう、力がなんとなく、ね。

息子 ええ。

娘 ……これは、とてもいい方法だわ。これから毎朝やるんですよ。みなさんの話では、朝というものはとてもいいものだといいます。

父 いったい、何年になるんだ。何年おれはお前を訓練してきたのだ。お前には積み重ねという

ものがまるでないのだ。

娘 父さん、今朝はここまでにしましょう。この子は勤めに出かけなければなりません。

父 お前は、日々の生活というものをなめていたから、だってお前、そうとしか考えられないじゃないか。いいか、お前、暮しという字と墓という字が似ていることに注目しなければならぬのだ。

娘 お前、さあいつていらっしやい。今日は久しぶりで父さんと姉さん、仕事がもらえました。ですから夕食はゼイタクします。お腹がすいても少し我慢していなさい。どうしたの……。

息子 姉さん、さよなら……。

■ あ、まただわ。

娘 やめて下さい。この子なにもしていません、そうですね。

父 勤めに出るといふのに、さよならとはなんだ、聞こえたのだぞ。こいつはなまけたいと思っ
ているのだぞ。

息子 なまけたいのです。

父 ……お前、なまけたら、どれだけ多くのことを考えることになると思うのだ。それを考えてみるのだ。考えというものは自然とおかしくなるものだ。おかしくなるようにできているんだ

よ。おかしくなっただけはおしまいだぞ。くいとめなければならぬ。考えをどこかでアイマイにできるのが人間だ。お前、なまけたらおしまいになるぞ。

娘 歯をくいしばって出かけるんです。……父さんとわたしにはあまり仕事が多くないわ。ですから、わたしたちにはあなたのお給料が必要な。あなたは少しずつでも安定した収入を運ばなければなりません。

父 ……お前には、役場の仕事が向いているのだ。街頭宣伝をやってみる、お前はそれ以上にガンジガラメだぞ。

息子 いいえ……。

■ ああ、あのオヤジ、またよ。

娘 ね、もし女の子のお友達でもいたら連れていらっしやい。しばらくぶりでいっしょにお酒でものみましよう。さ、いっていらっしやい。……くるのです。

■ 背をこごめて出ていくわ、あの子。

老婆 ね、口笛をふいてごらん

その凍えた唇で

あたし 待ってる

そんな唇の男となら

夢のあと味は そんなに

悪くないはず

恥かしいことをしましょう

あなた あたしの彼氏なの

そしてあたしは あなたの彼女なの

そうよ、あたし……

父 世話のやける奴だぞ。……なあ、お前、世話のやける奴だな。

娘 なぜあの子はあなんでしょう。……久しぶりで街へ出るんですね。

父 又、今日はいろんな人々に会えるのだなあ。いろいろな人々がみんな頑張っている。久しぶりだなあ、うれしいなあ。

サチコ あんた。

老婆 ……なんだ、おばさんか。

サチコ 駒子さん、あたしよ、サッチャンよ。サッチャンはね、サチコっていうんだ、ほんとはね
……。

老婆 そう、よかったね。

サチコ ……あいかかわらずなんだね、無口なんだね。無口な人って助平なんだって、フッフッフ。あ
っ、一寸まってね。

■なにする気なの、この人、他人の郁屋にムシロなんか敷いて。

サチコ コーヒーをおのみ、心まであたたまるからね。……どおう、どうだったかしら、あたし。
ステキだった？

……女学生の頃読んだ本に書いてあったのよ、それを思い出してね。……おじいさんがね、
冬の荒野をやってきた旅人にコーヒーをごちそうするのさ。親切なおじいさんでねへコーヒー
をお飲み、心まであたたまるからのおへ一言そういうのよ、一言。あれをまねしてみたくてね、
寒くなる日を三ヶ月も待っていたのさ。……じゃ、出かけてくるからね、飲んでおいておくれ

よ。

…：そうよ、今日も死に行くのだよ、ムシロを持って。枯木のように、枯木が春の風に吹かれてパタリと倒れるように死ぬというのも、仲々にむつかしいよ。…：これで四年も毎日出かけてるだろう、日課になってしまったものだから、おかげでだんだん軀が丈夫になってしまつて。…：じゃ行ってくるよ。…：ね、秋だって春風吹くことあるよね。…：そうかい。

老婆 知るもんか、あたしはそれどころじゃないんだもの。

9

老婆 そういえば、この頃あんな夢見なくなったけど、娘の頃はよく見たものよ。窓の外をよくびっこをひきながら通る、よぼよぼのおじいさんがいてね、そのおじいさんが夢に出てくるのよ。あたし、あのおじいさんにどこかの狭くなるしい部屋でいやらしいことされてる夢を何度も見たわ。自分でもびっくりしたけど、ほんとだったわ。あの子だって、あたしのこと夢に見てるかもしれないわ。だれでもそのくらいのことするわ、ただかくしているだけ。それにあの子若いんですもの。あんな凍えた口してるんですもの。

準備をしなくちゃね、夢だからってなにもなしじゃだめ、特に昼間の夢はね、入口が必要な

のよ。準備のたりない夢は、きまっただらしないわ。

着物がいいわ。そう、あの子にはあの着物を着せよう。どこにしまったかしら……。

あたしは、やっぱり、若くなくちゃね、少くとも、あの子をとりこにするまでは。

あたしは若いわ。お墓で裸になった時のように……そうね、あのお墓で逢うことにしようかしら。……そうね、いきなり裸するのはあれだから、襦袢を着てね。

いやよ、交尾するのはいや。あんなのはつまらないわ。もっと恥かしいことがいいの。

■ なにか空気がたよりないと思ったたら音楽がなかったんだわ。(注2)

老婆　　そうよ、この方がずっといいわ。お墓の前で、あたしは白い襦袢一つで、すっと、立っている。あたしたちは、簡単にはくっつけないわ。事情があつてね、その方がいいわ。

へあなたね、そこにいるの

へええ、あなたを見ていました、わたしです

へ待ったわ

へ遅くなりました。慣れない道なので

へ逢びきの場所をお互いにまちがえて、永遠に逢えなくなった恋人たちの話を思い出してしました

へそのようなこと、おっしゃらないで下さい

へああ、あたしの心に照らされて、なんていたいたいお月さま

■もういいわ、準備できたわ、ね、出てきていいのよ。

(以下、男とは隣家の息子の意)

男 こっちを向いて下さい。

老婆 なぜです。

男 お顔が見えないからです。どうしてなんだろう。わたしは、あなたとお会いしていると、とても自由になっていく。

老婆 あたし、あなたとこのままお別れする決心をしてみましたの。ですから、あたしたちお互いに顔を見ずにお別れした方が。

男 事情をお持ちなんですネ、なにか。

老婆 ええ、お許し下さいね、お誘いしておきながら。

男 よかったら、話して下さい。

老婆 そんな表現はおやめになって、あたしのこと、野菊の涙なんて。

男 野菊の涙……。そういえば、そのように考えていたかもしれません。

老婆 考えることには注意しないと、とんでもないことになることがありますよ。

男 ふるえていますよ。

老婆 夜霧が少し。

男 これでよろしかったら。

老婆 ぬくもりが欲しいんです。

男 でも、こんなところで抱かれて恥かしくありませんか。

老婆 いくらあたしの軀がつめたくても、墓石のようだなんて感じないで下さいね。

男 そんなこと感じるものですか。

老婆 ああ、よかったわ、あなたが観念論者じゃなくって。それでは……。

■このひとの胸、こんなに厚いとは思わなかったわ。いや、熱いのかしら。どっちだか、よくわからない……。ああ、このひとつたら、こんな抱き方ってあるのしら。

男 どうです

老婆 ええ、とても。

男 わたしは、どちらかというと、唯物論的に物を考えます。

老婆 女についても？……目がまわるわ。そうね、身をまかせたら、楽になるわ……地球になっ

たような気持だわ。

男 女の美は、ただ皮にのみ存している。なぜというに、皮の下にあるものを見ることができないならば、ひとは女を見て、おぞけをふるうことになるではないか。

老婆 なんて睦言かしら、もっとつづけて、もっと。

男 女の魅力は、ただ粘液と血液、体液と胆汁とに存する。いったい鼻の穴になにがあるか、喉の奥にはなにが、腹の中にはなにが隠されているか。みつかるのは、ただ汚物のみ。その痰だの糞だのには、指一本触れようとしな、そんなわれわれが、いったいどうして汚物袋を抱きたがるのか。……クリユニーとかいう神父さんの言葉ですがね。……ああ、今夜はどうしてこんなに勇気が出るんだろう。はじめてお会いするのに、こんなことがいえるなんて。

老婆 ああ、あたしお別れの決心の膝が弱ってきましたわ。そんなふうに抱かないで下さい。

男 そんなにいやな抱き方ですか。

老婆 ええ、とてもすてき。……手をゆるめないで。

男 ええ、放しませんよ。

■ さ、ごらんなさい、あたし顔をあげましたわ。

男 ああ、それがあなたですか。

老婆 お別れです、さようなら。

男 そんなことってあるもんか。

老婆 事情があるっていったでしょう。

男 障害はのりこえてみせるよ。

老婆 だめだわ。だって、あなたにそんな力があるかしら。

男 努力を、ね、努力するよ、誓うよ、ぼくは努力する。

老婆 弱い奴の努力なんか、あたし興味ないわ。

男 誓うよ、努力するよ。

老婆 じゃ、誓いのしるしよ。

■このあたしの足に接吻なさい。

老婆 ……そうよ、できたわね。さ、あたしたち……。なにしてるの、肝腎な時にチクオンキ奴！

■けとばしてやったら、蓄音機、いうことをきいて又音を流してるわ。いい子だわ。音楽がないと寂しいのよ。

老婆 ね、あたしたちどこ

どこかへつれて行って

凍えた口

開くとなんて

熱い息

その息をまじえて

行く先を言って

さ、あなた、

どこ、

どこにいるの……

10

■ なのよ、だれなのこの人たち。感情の水槽の栓を抜いた犯人はだれ！

老婆 いやよ、いやだよ。あとにしてよ、あんたたち……。

医者 うん……なるほど。

村上 で。

医者 生命の神秘、この一言です。

村上 で。

医者 それにつけ加えるべきなにごともありません。

村上 で。

医者 なあ、君。

看護婦 はい、先生。

村上 困っちゃうなあ。困っちゃうよ、村上さんは。

医者 わかりますよ。

村上 神秘が相手じゃなあ、困っちゃうよ。

医者 老衰の現象はです、要するに、人体をかたちづくる細胞や組織の全般的な萎縮であり、重要な細胞の変化や減少と、また結合組織の増殖を伴ってやってくるのですがね、その徴候は実に顕著なのですがね。君、つづきをやってみたまえ。

看護婦 はい先生。……老化の徴候は、即ち、骨や関節が萎縮してそのために身長も減じ、骨質は硬化して脆く折れ易くなり、下顎骨……ここです、この下顎骨の萎縮と相俟って歯は抜け落ち、筋肉の萎縮は神経機能の低下と相俟って、運動が緩慢となり、皮膚は乾燥して薄くなり、殊に

表皮の厚さを減じて乳頭も……おっぱいの先端です。乳頭も退化し、髪は白く、或は禿げ、また汗腺も萎縮します。循環系においても……。

医者 そのあたりでいいだろう。……つまり、要するに、こういった現象は、遂には呼吸や循環の中枢の機能停止を惹起して、個体の死へと移行するわけなのですがね。……村上さん、ちょっと。ここで興味深い問題があるのです。……細胞や組織をですね、われわれの身体から切離して適当な方法で培養すれば、一向に萎縮を起すことなく、いつまでも成長と分化を続けていくらしい事実があるのです。たとえば、子宮ガンのヒーラ細胞はですね、一九五一年にアメリカの女性の子宮ガンから分離培養したそれは、今でも増殖を続けていましてね。……つまり、この現象を先へのばして考えていきますと、これは、不死ということがありうるということころへ行ってしまうのです。

村上 不死ですか。困ります、困っちゃうな、村上さんは。

妻 ああ、ああ、運動会はじまっていますよ。

村上 ああ、わかってるよ。そんな大声出すな、バカ。

■ 那样的いえば、運動会の音楽だわ、あれ。花火まであがってる。

世の中って、ひろいのね。運動会やってる人たちがいるんだわ、この世には。

妻 あ、先生でいらっしやいますか。村上の家内でございます。ああた、いいんですか。

医者 あ、どうも。……なんだ、その目は。なにがいたいんだ。道理がないじゃないか、キミには。えっ、筋道がない。お前の道理が世間に通用すると思うのか。ものにははじめというものがある。あの夜、手術室でわたしを待っていたのは、だれだ。だれのせいなのだ、いったいこれは。

看護婦 何度いったらわかるの？ 二年前のあの夜は、あたし手術室を掃除していたんだわ。

妻 ええ、掃除もこれで結構大変な仕事なんですのよ。なのに、この人ったら、このアパートの管理の余暇に、少年野球の監督までしておりますの。

村上 こんなところで、こんな時にやめろ、バカ。

看護婦 掃除を忘れたのを思い出したの。思い出したら寝つかれなくてやり出してたんだわ。

妻 ええ、この町の大会で優勝したら、その時には区の少年野球連盟を組織しようって、ね、ああた。

村上 バカ、話を大きくするな。将来の夢を語ることは、人をおろかに見せることになるんだぞ。

医者 今夜も、手術室で待ってるくせに。

看護婦 いやよ、いかないわ。

医者 待ってるくせに。

妻　そりゃ、あたしだってその日のくるのを待ってますわ。このひと、そもそもアパートの管理だけではおさまれない器なんですわ。あたしは、このお仕事だけで一苦労ですのにつて申すんですけど、きかないんですの、ね、ああた。連盟の仕事が一段落したら、それを地盤に、つぎは区議員に立候補してみようかなんて申しましてね。

村上　お前、状況を見てみる。この場の現在の状況は、お前の話を少しも受け入れていないのだぞ。

■ 煮えすぎちゃうわ、のびちゃうわ、ラーメン。……ああ、やっぱりだわ。……なに驚いた貌なさっているんです、みなさん、わたくしミミズをすすってるわけではありませんのよ。……踊らせてやるよ、あたしあんたたちの無駄口につきあっていられないのよ。

11

蓄音機から、フォークダンスの音楽（注3）がゆるく流れる。

■ さ、風景、出ておいで。運動会の匂いって、どんなだったかしら。汗のランニングシャツ……

ブルマ、そうね、そういうえばブルマって、思い出そのもののかたちをしてるわ、ぶわぶわしてて。さ、みなさんも、風景にお入り。フォークダンスを踊るのよ……そうそう。

割合おいしいわ、それほどのびちやいなかったわ、ラーメン。……みんな、わるくなさそうな貌して踊っているじゃない。どう？

いやに暗くなってきたわ。……どうしたのかしら。もう少し踊っていてもいいのに……行っちゃうのね。……そうよ、毎日そんなふうな貌して幸せにお暮しよ。……看護婦さん、どうしたの、あのヤブといくのいやなの……。なによ、それ。……お線香、ね、なにをするの。運動会にお線香なんか持って。……おや、こっちにも、だれか……暗くて、見えない……顔をかくして、だれなのさ……一人、二人……三人……。お線香の匂いやめてよ、まずくなるわ、ラーメン。

子供たち 卒都婆がすすく

なに吸って育つ

卒都婆がすすく

なに食って育つ

ここかい

あんたの四畳半

老婆 月に照って

荒れた野に

月に染みて

荒れた野に

あたしの住いは荒野だよ

生れて

この方野宿だよ

四畳半の

荒野で野宿だよ

なにが欲しくてやってきた。

子供たち 布団

襖

タンス

なにかも

老婆 いいよ、いいよ

なんでもかでも

持っておいき

そのかわり

なにひとつ

残さないでね

これが

唯一の条件さ

12

■ ……ずいぶん、多勢の、人たちが湧き出て……そうよ、なにもかも持って行って……ああ、襖が舞って行く。……これ、このラーメンのお鍋どうしよう。……卓袱台が川を流れて行く……川があるわ。ね、水の音だわ。これも流して、このお鍋……。すっかりよ、すっかり持って行って。この部屋がすっかりこの世から登録を失うまで。

老婆 あなた、まだよ、この人たちが、いなくなったらね、部屋がなくなったらね……もう少しのしんぼうだわ。

せいてはだめよ。あたしたちの時間を手に入れるのに、このくらい我慢できないようじゃだめ。

どう、なにもかもなくなるって割合いいながめね、脱皮する時の気持がわかるような気がするわ。あの虫たちや蛇たち、こんな楽しみを味わいながら生れてくるんだわ。

■部屋って、この世をせばめる枠なのね。なくなってみると、宇宙と仲よくなるような気持。さ、出て来ていいのよ、あなた。
あたしたちの時間だわ。

13 (注4)

老婆 泉の水を飲みましょう

精をつけるのよ

地球の精を

だって

これからあたしたち愛し合うんですもの、精いっぱい

哺乳類よつあしみたいなやり方で

飲みましょう

泉の水を

恥かしいことをしましよ

ひとが見たら

ぞっとするほどの

ね

そしたら楽になれるわ

あたしたち

おいしい

水っていいわ

あなたは どう

あなた鳥みたい

その飲み方

本質を見破ったわ

鳥類だったのね あなた

ね

恥かしいことできて？

おしっこして

おしりをびしょぬれにして

しまうとか

ね

あなたはなにができて？

∴∴口をきかないのね

ね

それなら

あたしがする

恥かしいこと

見ていることが

できるかしら？

うん

どんなものが

むき出しにされても

思い切り恥かしいことでも

雪

みたいな

姿勢で

老婆　ほんとよ、あなたの声って、雪みたい。その声におぼれてしまいたいわ。ね、おぼれるって、たまにはいいことよね。

うんこだってできるわ、あたし。

男　ね、あそこに小さな小屋がある。あそこへ行こう。

老婆　あそこで、なにをするの、あたしたち。うんこするの？

男　うん……ローソクの小さな灯に手をかざすのさ。

老婆　そして、どうするの。

男　これで充分だって気になるのさ。ただこうしているだけでいいって。

老婆　そう、そうね、うんこしあった仲間なんですものね。

男　どうだい。ぼくたちは、今、愛し合っているんだよ。頭で考えちゃだめだ。そうしたらわからなくなるけど、これがそうなのさ。恥かしいことをやりつくして、そして、だからほら、こんなにしていられるんだ。ローソクに顔をゆらされている。

老婆 ね、なにか言って。

男 話してるじゃないか。

老婆 へ愛してるよ〜とかって。ね、普通のこと言ってる。へ可愛くってたべちやいたい〜とかって。

男 愛してるよ。可愛くってたべちやいたい。

老婆 ほんとなのね、うれしいわ。ね、ケンカしましょうか。

男 いやだよ、きみはぼくの可愛い蝶々だ。

■ほんと、あたしの軀がふわりと持ち上っているわ、いい気持。……あなた、蝶々のよろこばせ方を知っているのね。

老婆 ね、ケンカしましょう。

男 ケンカしているうちに思わず、剃刀できみの乳房をさいてしまうんだ、ね。

老婆 スツとね。……あんまりあざやかなもので、気づかずにいるわ、あたし……でも気づいた

時には……。

男 そんなに深い傷じゃないのさ。ぼくは、きみの軀を浜辺によこたえて介抱しているのさ。

老婆 浜辺ね……ね、あたし重傷よ。

男 重傷でも平気さ、お月さんがきみの軀をなめて、なおしてくれる。

老婆 そのかわり、お星さまが、あなたの軀に傷をつけるわ。

男 当然の罰だよ。

老婆 あたしの軀を傷つけたんですものね。……ね、悲しい別れをやりましょうか。

男 どこかへ行くのかい。

老婆 あなたがね。

男 ぽくが、どこかへ……。

老婆 ね、どこかへ行ってしまいなさい。

男 それじゃ、さよなら……。

老婆 鳥じゃあるまいし……。たりないわよ、そんなやり方じゃ。少しも悲しくないわ。

男 ……。

老婆 ね、なんのつもりなの……。どこへ行くの。これじゃ、大なしだわ。もう少しなんとか言っ
てからよ……。やりなおしよ。……あなた……。帰って来て。知らないわよ、あたし。

……おこったの……。だってあなた、当然の罰だっていつていたじゃない……。

■ いいわ、帰りづらくなったのね、それじゃ十かぞえる間に帰って来て。いい、かぞえるわよ。

一、二、三……。本気よ、あたし。四、五、六、七……。かぞえおわったら、もうあたし、帰ってきた
って相手にしないわよ。八、九……。十。

老婆 いけ いけ

いっちまえ

鳥類はだからいや

足音も立てずにいっちやうから

真面目なやつはだからいや

一寸冗談いっただけなのに

いけ いけ

いっちまえ

どこかで聞いた

歌にあったわ

もうすぐ春が来る

春といっしょにいつておしまい

そして

いつか忘れてしまう

この夢は正気の沙汰じゃ

なかったんだって

正気の夢って見てみたいわ

そういつてやりたかった

そんな歌うたうやつに

あたしのこと

蝶々

なんていったくせに

そうよ

あの鳥類

あたしを同類に

してしまいましたかったのよ

蝶々

なんていつて

もう聞こえないでしょうけどね……。あたしはあんな近視野郎じゃないんだよ。あんなにヒラヒラやれるのはその証拠だよ。満足しきってなんだい。太鼓腹つき出してツマヨージくわえているような奴だよ、蝶々は。あたしを、あんなちっぽけな奴のようにしてしまいたかったんだね。掌へのせて愛撫したかったんだね。あたしはそんな女じゃないわ。それなら、ねえ、いっそのことあたしを蛾にしておくれ。蛾はね、近眼じゃないからね、花なんかには目もくれず、星やお月さまに向って飛べるのさ。

■ね、軀が、ほら、蛾になったように、昇って行く。そうよ、宇宙と仲よしになったんだもの。

老婆 宇宙なんて目にも入らなかった

けど 今まで

最期には

同盟を交わす

ものなのかしら

あたしの生れた村

あたしの住んだ街

みんな見えるわ

可愛らしいわ

手を

振ってあげようかしら

だれが

やるもんか

同盟なんて

潰たれ同志の

堀り矩撻

四畳半たら あたしの

なんて朗らかな貌

まるで足の裏みたい

とうとう

なれなかった

十六に

ひとには

こんなこといえない

けど

そうだわ 十六になんて

でも

特権を手にしたわ

蛾になれた

こんなに高く

落ちるのはいや

あたしちゃん

このままよ

空にいれば安心

だって

空には暗礁がないから

坐礁することないわ

寒い

なんて

感じちゃだめ

15

でも
だめ 期待は
鳥類は
無力だわ
寒い
羅針盤がきかない
だめ まちがえちや
ここはね
ね
ここにね
ここに
あるのは
あたし

襜褕の十二単衣に身をつつんだ老婆が、ひとりいる。

老婆 夢が、あたしの槍がさびをつける時なんだもの、寝起きがいちばん冷えるのさ。闇が、あたしの楯がとけていくんだもの。夜が、あたしの鎧が脱げていく時なんだもの……。

あれは……星よね。消えていないんだねえ、まだひとつ。あたしったら、遠い星はよく見える、身のまわりには盲のくせに。……残っちゃまった星ひとつ……未練だよ、消えな、さようなら。

ふっ……。

老婆、ひとり風のありかを訪ねるように、あるいはゆるい風に身をまかせるようにして去る。

注

(1) たとえば、ヴィヴァルディの「ピッコロ協奏曲イ短調」の第一楽章を、1/2テンポにしたもの。

(2) 女の歌手のうたう歌謡曲。たとえば、八代亜紀の「花水仙」。

- (3) だれでも聞いたことのある曲。たとえば、「オクラホマ・ミクサー」。
- (4) たとえば、ラヴェルの「ダフニスとクロエ」の「夜明け」の部分。

底本

- 『太田省吾 劇テキスト集（全）』 早月堂書房 二〇〇七年九月十四日 初版発行
- 『小町風伝 太田省吾戯曲集』 白水社 一九七八年